

# 英語語法文法学会 第22回大会資料

日 時： 2014年10月25日（土）

開催地： 摂南大学（寝屋川キャンパス）

住所： 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8  
<http://www.setsunan.ac.jp/>

**英語語法文法学会**

*The Society of English Grammar & Usage*

September 2014

---

# 英語語法文法学会第 22 回大会プログラム

---

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,500 円 学生 2,000 円（予稿集代を含む）

日 時：2014 年 10 月 25 日（土）

<昼食はご持参ください。学内の食堂・コンビニもご利用可能です。>

**開催地：摂南大学（寝屋川キャンパス）**

住所：〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町 17-8  
<http://www.setsunan.ac.jp/>

順路：京阪「寝屋川市駅」より、西口 3 番乗り場から 京阪バス  
[3][5][10][11][12] 系統で約 15 分

●大阪駅からは

JR 大阪環状線（外回り）で、京橋へ約 5 分、京阪本線（準急または急行）で京橋駅から寝屋川市駅まで約 15 分

●京都駅からは

近鉄京都線で丹波橋駅へ約 10 分、京阪本線（特急）で枚方駅へ約 20 分、（準急または普通）で寝屋川市駅へ約 10 分

開催校委員：家口美智子、西川眞由美、田中秀毅、住吉誠

●ワークショップ（5 号館 542） ● 研究発表（5 号館 542、543） ● 総会（5 号館 551）  
● シンポジウム（5 号館 551） ● 一般休憩室・書籍展示（5 号館 541B）  
● 司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控え室（5 号館 544A） ● 大会本部・運営委員会室（5 号館 541A）

受付：10 時 00 分より 11 号館エレベーターホールおよび 11 号館／5 号館ホール

ワークショップ（5 号館 542） 10:40 - 11:31

司会 吉田幸治（近畿大学）

1. 「be ... to V 構文の文法化—義務を表す表現を中心に—」  
武内祐樹（関西学院大学大学院）
2. 「コーパスデータに基づく“had better 構文”の新しい語法」  
長谷川順子（大阪工業大学非常勤）
3. 「happy と glad が従える補文標識 that の有無に関する一考察」  
土屋知洋（防衛大学校）

受付：12時30分より

研究発表 13:00 – 14:45

第1室（5号館542）

司会 野村忠央（北海道教育大学）

1. 13:00 – 13:35 「on top of と at the top of について」  
西前 明（明治学院大学非常勤）
2. 13:35 – 14:10 「Yes-No 疑問文に現れる認識的用法の may について」  
明日誠一（青山学院大学非常勤）
3. 14:10 – 14:45 「比較の強調語句に関する文法知識の検証」  
井上 聡（環太平洋大学）

第2室（5号館543）

司会 松山哲也（和歌山大学）

1. 13:00 – 13:35 「証拠性を表す have it that 構文」  
五十嵐啓太、本多正敏（筑波大学大学院）
2. 13:35 – 14:10 「“I so envy her and her talent!”  
envy: dative verb から emotion verb へ」  
松元豊子（神戸市外国語大学非常勤）
3. 14:10 – 14:45 「英語における有方向動詞の存在意義を問う」  
出水孝典（神戸学院大学）

総会（5号館551）15:00 – 15:20

開会の辞	会長	内田聖二	（奈良大学）
開催校代表挨拶		今井光規	（摂南大学学長）
学会賞選考報告	会長	内田聖二	（奈良大学）
事務局報告	事務局長	五十嵐海理	（龍谷大学）

シンポジウム（5号館551）15:35 – 17:45

テーマ 「文法化と構文をめぐって」

司会 松村瑞子（九州大学）

1. 「文法化研究の展開—談話標識をめぐって—」  
川端朋広（愛知大学）
2. 「文法化と構文的变化」  
米倉よう子（奈良教育大学）
3. 「構文化の射程と文法化」  
前田 満（愛知学院大学）

閉会の辞 家口美智子（摂南大学）

懇親会 18:00 – 19:30 会場：スカイラウンジ（11号館13階）

（懇親会費：一般 5,000円 学生 3,000円）

ワークショップ (5号館 542) 10:40 – 11:31

司会 吉田幸治 (近畿大学)

be ... to V 構文の文法化 —義務を表す表現を中心に—

武内祐樹 (関西学院大学大学院)

本発表は、これまで準助動詞として分類されてきた多くの be ... to V 構文の中でも、本来義務を表す表現に焦点を当て、それらに文法化が起きていることを論ずる。これまでの研究では文法化が起きる重要な要因に、ある形式が繰り返し使われることでもたらされる「頻度の効果」というものがあり、それによって音韻形式、統語形式、意味が相互に関連しながら変化するとされてきた。しかし、本発表が対象とする準助動詞は頻度が少ないものが多く、また統語形式にも変化が見られない場合も多い。そのため、従来とは異なるアプローチで考察する必要がある。それは、意味から出発するアプローチであり、義務を表す表現は(1)のような英語話者の心の中にあるメタファーによって文法化が生じる、というものである。

(1) [BINDING] → [OBLIGATION] → [PROBABILITY]

つまり、義務を表す表現は物理的に「縛る」という意味が、人を「束縛する」という義務の意味を、そして「きっと～するだろう」という可能性の意味を表すようになるのである。このような変化が多くの義務を表す表現に起きていることを見ていきたい。

コーパスデータに基づく“had better 構文”の新しい語法

長谷川順子 (大阪工業大学非常勤講師)

“had better 構文”の用法にはいくつかの未解決の問題がある。第1に、実際にはどのような場面で用いられるか。第2に、人以外が主語となるのはどのような文脈・意味においてか。第3に、従来の辞書記述を超える変化形の実体はどのようなのか。

第1の論点では、实例を調べた結果、この構文がある行動を勧める目的で親しい者同士の間で気軽に用いられる場合があることに注目する。第2の論点では、人以外の名詞(句)が主語に立つ場合を検討する。主語が it であるパターンを中心に、人以外の主語が“had better 構文”でどの程度用いられているかをコーパスデータに基づいて明らかにする。第3のポイントでは、“had

better 構文”が他の構文とブレンディング (blending) を起こす事例の検証を行う。It is better+原形動詞といった変化形がかなり普及していることがわかった。たとえば、It is better talk about ~ は、It is better to talk about ~ と It had better talk about ~ の blending だと考えられる。他に It is better go ~ / It is better be ~ などについても実例とコーパスデータに基づいて分析結果を報告する。

## happy と glad が従える補文標識 that の有無に関する一考察

土屋知洋 (防衛大学校)

本発表では、(1a)と(1b)にみられる形容詞 happy と glad が従える補文標識 that (以下、that) の有無の実態とその要因について考察する。

(1) a. I'm happy (that) you could come. (OALD<sup>8</sup> (s.v. happy))

b. I'm glad (that) you're feeling better. (OALD<sup>8</sup> (s.v. glad))

先行研究では、頻度の高さ、話し言葉といった要因で that がない形式 (本発表では ZERO 型) をとるとされる。Bolinger (1972: 56-58)では、“引き起こされた状態”を表すのに that が必要 (THAT 型) としているが、用例には他の要因も絡んだものが見られ説明し尽されていない印象を受ける。

本発表では今一度、各形容詞の意味を統語的観点から再考し、BNC の話し言葉のデータで that の有無について検証を行った。その結果、同じ話し言葉で頻度差があっても、「一時的感情」を表す glad は ZERO 型傾向に、「一時的・持続的感情」を表す happy が THAT 型傾向にあることが明らかとなった。また、「反芻的」に感情に至ったか、「即断的」に感情に至ったかという経路の相違が THAT 型と ZERO 型を引き起こす要因となっていることが実例などからも明らかとなった。本発表から、先行研究の反証と共に that の有無のメカニズム解明の新たな切り口を示すことができると考える。

研究発表 13:00 – 14:45

第 1 室 (5 号館 542)

司会 野村忠央 (北海道教育大学)

on top of と at the top of について

西前 明 (明治学院大学非常勤)

場所を表す前置詞 on と at について、両者と top/bottom/front/back/side のコンビネーションに絞って、インフォーマントから得た用例を基に考察する。中心に置く問題は：(1) There is a fly *on top/at the top* of the cabinet.において、「a fly が the cabinet の内側の上面 (=天井) にいる」という状況で、at the top of は使えるが、on top of は使えない (bottom/front/back についても同じ)；(2) There is a fly *on/at* the side of the cabinet.において、「a fly が the cabinet の内側の側面にいる」という状況で、on the side of は使えるが、at the side of は使えない；(3) There is a treasure box *at/\*on* the bottom of the hole.//There is a treasure box *at/\*on* the bottom of the lake.//There is a huge iceberg *at/\*on* the bottom of the planet.において、on は好まれない。主にこれらの問題に答えを与えながら、[on~] 対 [at~]、および、[~top/bottom/front/back of~] 対 [~side of~] の対立を明らかにする。鍵となるアイデアは、「at = 「~の付近に」」、および、「top/bottom/front/back には“表”と“裏”が生じ得るが、side には生じない」である。

Yes-No 疑問文に現れる認知的用法の may について

明日誠一 (青山学院大学非常勤)

認知的用法の may (MAY) は、肯定極性項目 (PPI) (断定項目とも呼ばれるが、ここでは名称を PPI に統一する) であり、話し手が yes の答えを期待する有標の Yes-No 疑問文 (YNQ) にのみ現れる、と主張する (一般に、付加疑問文 (TQ) と平叙疑問文 (DQ) は、YNQ に含まれるが、ここでは、Yes-No 問い返し疑問文 (YNEQ) も含めて考察する)。

MAY を PPI と分析する Palmer (1987)、Declerck (1991)、Israel (2011) を参考に、(1) MAY が無標の YNQ に現れない理由、(2) MAY が肯定の極性を持つ理由、(3) MAY は有標の YNQ に現れる、の 3 点について考察する。

## 比較の強調語句に関する文法知識の検証

井上 聡（環太平洋大学）

比較の強調を説明する用例としては、‘My boyfriend is *much / far* older than me.’ のようなものが一般的であるが (Swan, 2005, p. 117)、比較級や最上級の強調語句が複数提示されるのみで、意味の違いを含め、使い分けに関する記述はほとんど見られない。可能態と実現態の違い (Hymes, 1972) を測るべく、コーパス分析に基づき、用法の典型性について調査した結果、次のような情報が得られた。(1) 比較の強調語句としては *much, even*、最上級の強調語句としては *the very, by far* の使用頻度に際立ちが認められた。(2) *a lot (lots), much, the very* の使用域が話し言葉であるのに対して、*far* を含む語句 (*by far, far and away*) の使用域は *academic, magazine* といった書き言葉であった。(3) *much, the very* の後続部が屈折比較で占められるのに対して、*even, by far* の後続部の大半は迂言形であった。このような、使用頻度、使用域、コロケーションにおける使い分けの傾向は、今後の教材作成において扱われるべきであり、英語教育の現場においても、学習者に対して明示的に指導されるべきであろう。

司会 松山哲也 (和歌山大学)

証拠性を表す have it that 構文

五十嵐啓太 (筑波大学大学院)

本多正敏 (筑波大学大学院)

Chafe (1986) によると、言語ごとに証拠性 (evidentiality) の表し方が異なる。英語では法助動詞や副詞、イディオム表現で証拠性が表されるとされるが、証拠性を表すために固定化したイディオム表現については、そのすべてが十分に記述されていないと考えられる。そこで本発表では、英語の証拠性に関する記述面の充実を目的とし、(1)の下線部を含む表現 (以下、have it that 構文) が証拠性を表すために固定化した表現であることを論じる。

(1) Rumor has it that she is getting married.

(『ジーニアス英和辞典第 4 版』)

具体的にいえば、この構文は、主語 NP が that 節内の情報の情報源であることを表す。例えば、(1)の場合、she is getting married という情報が主語の rumor を情報源としていることが表現されている。

have it that 構文の意味・語用論的研究として Brugman (1988, 1996) が挙げられるが、記述面において不十分な点を含む。証拠性の観点から have it that 構文を分析することで、Brugman で説明が困難であった例も含め、この構文の語用論的・統語的事実を包括的に捉えることが可能になる。

“I so envy her and her talent!”

envy : dative verb から emotion verb へ

松元豊子 (神戸市外国語大学非常勤)

動詞 envy は、その意味が二重目的語構文に適合しなくなり、使用頻度も低下しているとの指摘がある。一方、小説やブログなどで (1) (2) のような、[him and his] という形式をもち、強い感情を表す用法が多く見られる。

(1) I envy him and his flat stomach!!!! [V + him and his]

(2) I so envy her and her talent! [so + V + her and her]

通常二重目的語動詞は、行為の程度性という概念にはなじまないが、envy は人の心理を表す動詞ゆえ、感情の程度に応じて so などの程度副詞と共に起す。envy 以外にも admire, deplore 等の Gradable Verbs (Quirk et al.) は程度



副詞を伴う [so +V] の形式に生起し、その多くが [V + him and his] の形式にも現われる。この形式の特筆すべき表現効果としては、“envy him and his talent” を例にとると、ある人とその人の数ある特性の一つである talent を同等のものとして位置付けることで、強い一体感と感情を表していることである。

envy は gradability という特性を持つ emotion verb として so などの程度副詞と共に起るといふ事例を報告するとともに、envy がなぜ、二重目的語構文の意味的制約から離れて [V + him and his] 構文に移行することでより効果的に主観的評価を表す構造へと変化を遂げてきたかを考察したい。

## 英語における有方向動詞の存在意義を問う

出水孝典（神戸学院大学）

Talmy (1991, 2000) では、ある着点への移動を表現する場合に、walk, run のような移動様態動詞と、arrive, leave のような有方向移動動詞の、いずれを基本的に用いるかで世界の言語が二分されるとしており、英語のように移動様態動詞＋着点句で表現する言語を衛星枠付け言語、日本語やフランス語のようにそのような表現を取れず、有方向移動動詞を通例用いる言語を動詞枠付け言語と呼んでいる。そうすると、本来の性向に合わない有方向移動動詞がなぜ英語に存在するのかという疑問が残る。

本発表ではまず、移動様態動詞＋着点句の表現法とは異なり、有方向移動動詞は意味と統語の同型性をもつがゆえに、実はすべての言語に存在することを主張する。そして、移動様態動詞＋着点句よりも1つの節内で表せる情報量の少ない有方向動詞をなぜ英語で用いるのか明らかにする。具体的には、英語の使役交替を論じた Rappaport Hovav (2014) を参考に、様態が表現されず英語で有方向移動動詞が用いられる条件として、(i-1) 様態が既定値である、(i-2) 様態が直前で言及されている、(ii) 話者が様態を知らない、という3つの場合があることを例証し、英語であえて移動様態動詞を用いず、有方向動詞によって移動を語彙化する選択肢の存在意義を明確にする。

テーマ 「文法化と構文をめぐって」

司会 松村瑞子 (九州大学)

文法化研究の展開—談話標識をめぐって—

川端朋広 (愛知大学)

(1) I think you're pretty safe, *considering*. においては、動詞 consider の ing 形が「割に」という意味で副詞的に用いられている。そこには、主節で述べられる命題内容に対して断定的なニュアンスを避けたいという話者の態度が表現されている。こうした語用論的機能を持つ文副詞、すなわち談話標識 (Discourse Marker) が 1990 年代以降は文法化研究の中心的なトピックのひとつとして扱われてきた。また、こうした例は単一の語の変化に限定されるものではなく、(2) People let you down and, *let's face it*, you let others down. のような例では節が固定化し、談話標識として機能している。

しかしながら、こうした事例を文法化の例として扱うには、いくつかの問題も存在する。文法化において顕著に観察される現象である「脱範疇化」や「主観化」などは、典型的な例と同様に観察されるものの、形式上の縮約などは必ずしも観察されるとは限らない (cf. *in case* -> *just in case*)。

本発表では文法化の文脈における談話標識研究を概観するとともに、句や節といった要素を扱う際には、古典的な文法化の原則だけでは説明が困難であることを示し、それに対する解決策として、Construction Grammar の考え方を応用した代案も紹介したい。

文法化と構文的变化

米倉よう子 (奈良教育大学)

文法化とは「語彙項目および構文が文法的機能を果たすようになること、あるいは一旦文法化された後もさらに別の文法機能を発達させること (Hopper and Traugott 2003)」と定義されるが、ある構文が文法化の舞台となるとき、文法化とその舞台となる構文はどのような相互作用を見せるのだろうか。また、文法化と並び、最近では構文文法の知見を活かした「構文的变化」の研究も少しずつ増えつつある (Hikpert 2013)。そこで本発表では、まずは

英語受動態構文の文法化を概観し、この文法化の流れの中に受益者受動（二重目的語構文の受益者項が主語となる受動態文、例: I was given the wrong medication.）の発生を位置づける。続いて本発表の後半では、後期近代英語期の受益者受動構文を構文的变化の観点から観察し、受益者受動文が後期近代英語期においてどのような構文ネットワークを形成しつつあったのかを考えたい。受益者受動の広がり进行分析する際には、個々の動詞の語彙的意味や現れうる統語構造的な特徴をも考慮に入れる必要があることを主張する。なお、データ採取には The Corpus of Late Modern English Texts (ver. 3.0) (De Smet 2013) を用いる。本発表で扱う動詞の数は限られているため、決して網羅的なものとは言えないが、この時代の与格交替構文研究に貢献する数量データを提示することも本発表の目標の一つである。

### 構文化の射程と文法化

前田 満（愛知学院大学）

構文文法の興隆以来、共時的な構文研究はめざましい進歩をとげ、大きな潮流へと発展してきた。対照的に、構文の通時的様相はこれまでほとんど注目されていない。しかし、近年になって、J. Bybee や E. C. Traugott などを中心とした研究者たちが、文法化との関連で構文の発達過程（構文化）に注目している。現在の構文化研究の主な課題となるのは、(i) 構文化として扱われうる現象の範囲を見極めること、(ii) 文法化における構文化の役割および文法化と構文化の関係をより明確にすることがあげられる。本発表では、まず (i) について、脱従属化 (insubordination) ——従属節構造の独立節への発達——をとりあげ、この現象を構文化の特殊例とみなせばそのメカニズムを明らかにできることを示したい。この現象に対して過去にいくつかの提案がなされてきたが、原理だった説明は皆無に近い。したがって、この現象に原理だった説明を与えることができれば、史的構文研究の有効性のほどを示すことができる。なお本発表では、脱従属化の例として、主に to think 感嘆文 (e.g. And to think I made her so happy!) をとりあげる。また、(ii) についても、to think 感嘆文を例にとり、文法化の結果として生ずる文法形態素 (grammatical morpheme) を構文化の副産物とみなす可能性を示したい。

## 英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正			
会長	内田聖二			
事務局長	五十嵐海理			
会計	住吉 誠			
会計監査委員	大竹芳夫			
運営委員	牛江一裕	内田聖二	大橋 浩	大室剛志
	神崎高明	吉良文孝	澤田治美	関 茂樹
	滝沢直宏	西田光一	林龍次郎	松村瑞子
	安井 泉	吉田幸治		
編集委員	中澤和夫 (編集委員長)			
	牛江一裕	大竹芳夫	大室剛志	神崎高明
	吉良文孝	関 茂樹	中山 仁	西田光一
	林龍次郎	松村瑞子	安井 泉	吉田幸治

発行日 2014年9月5日

---

編集・発行 英語語法文法学会

代表者 内田 聖二

事務局 〒520-2194

滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1-5

龍谷大学社会学部 五十嵐海理研究室内

TEL: 077-543-7436/FAX: 077-543-7615

E-mail: [segu.office@gmail.com](mailto:segu.office@gmail.com)

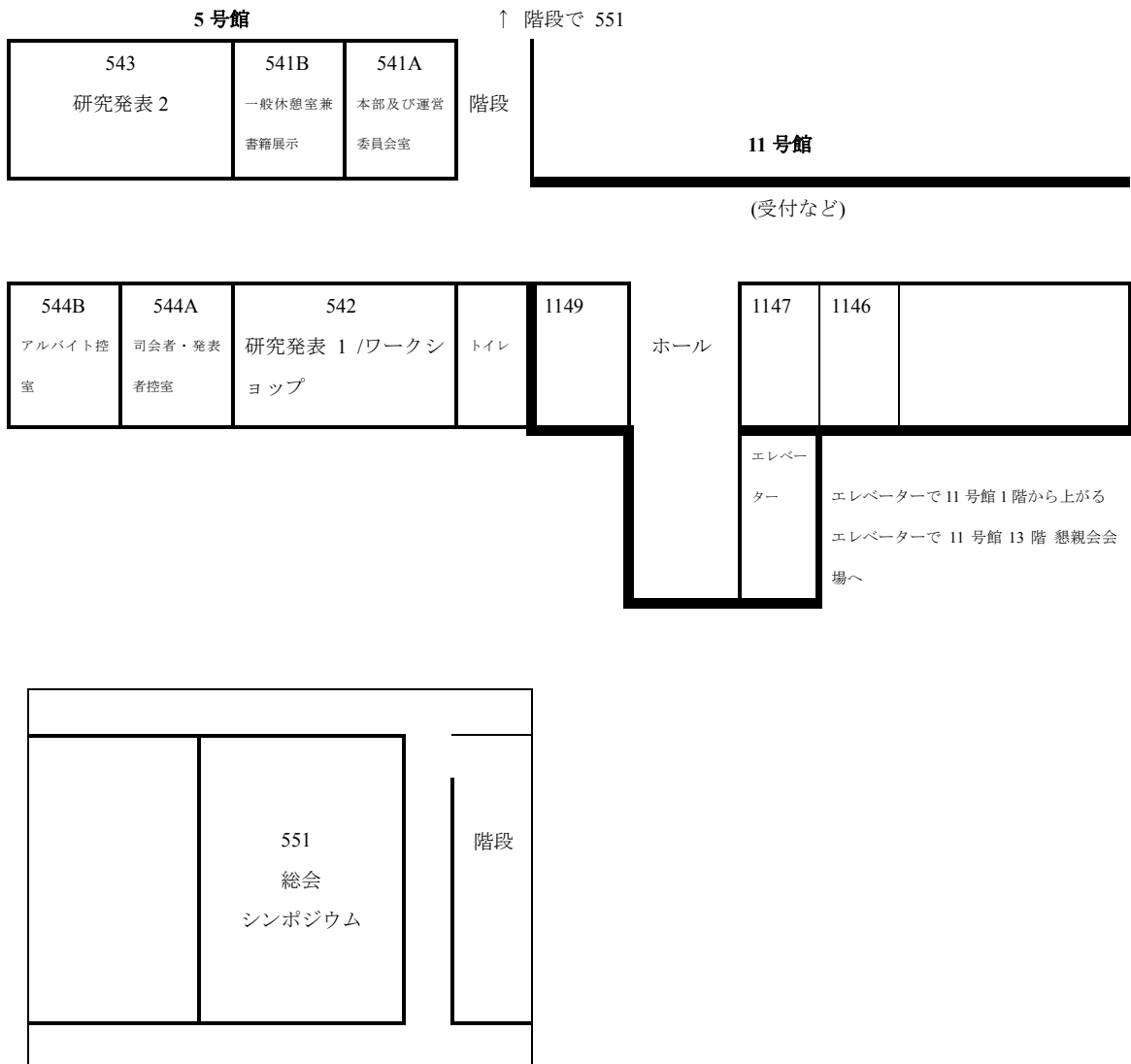
URL: <http://segu.sakura.ne.jp>

振替口座 02260-0-70393 英語語法文法学会

© 英語語法文法学会

---

## 部屋配置図



\*5号館と11号館は廊下でつながっています。

\*\*総会/シンポジウム会場へは階段で1階上がるだけです。

◆第22回大会開催案内

英語語法文法学会第22回大会を下記の要領で開催します。

日時：2014（平成26）年10月25日（土）

会場：摂南大学（寝屋川キャンパス）

〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

<http://www.setsunan.ac.jp/>

順路：京阪「寝屋川市駅」より、西口3番乗り場から 京阪バス[3][5][10][11][12]系統で約15分

●大阪駅からは

JR 大阪環状線（外回り）で、京橋へ約5分、京阪本線（準急または急行）で京橋駅から寝屋川市駅まで約15分

●京都駅からは

近鉄京都線で丹波橋駅へ約10分、京阪本線（特急）で枚方駅へ約20分、（準急または普通）で寝屋川市駅へ約10分

■ タクシー連絡先： 日本タクシー 072-827-5158

■ バス時刻表

行き

最寄駅→摂南大学（寝屋川キャンパス）京阪バス時刻表（土曜日）

① <京阪>寝屋川市駅→摂南大学（京阪寝屋川駅 西口）（所要時間 約15分）

行き先	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
[11] 摂南大学 [直通] 太間公園	太 41	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 18 太 48	太 17	太 06	太 06	太 07	
[3] 摂南大学經由 [5] 点野循環 [10] 大日駅 京阪守口市駅	左 29	日 38	日 38	日 38	日 38	日 38	日 38	日 38	日 38	日 38	日 38	日 38	左 38	左 27	仁 36		仁 07
[12] 摂南大学經由 JR 茨木東口 鳥	06 21 鳥 51	06 31	01 31	01 31	01 31	01 31	01 31	01 31	01 31	01 31	01 31	01 31	01	01			

のりば：西3番のりば

太印=[11]摂南大学～太間公園行 NS印=[直通]ノンストップ・摂南大学行

守印=[3]点野～京阪守口市駅行 日印=[5]点野・仁和寺・金田～大日駅行

左印=[10]点野・仁和寺～寝屋川市駅行 仁印=[10]点野～仁和寺止 鳥印=[12]上鳥飼北止

② <阪急>茨木駅→摂南大学 (所要時間 約 35 分)

行き先		7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
[12]	寝屋川市駅		01 16	04 34	04 34	04 34	04 34	04 34	04 34	04 34	04 30	00 35	05 39	11	08			

③ <JR>茨木駅→摂南大学 (所要時間約 40 分)

行き先		7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
[12]	寝屋川市駅	57	12	00 30	00 30	00 30	00 30	00 30	00 30	00 30	00 26 56	31	01 35	07	04			

帰り

摂南大学 (寝屋川キャンパス) →最寄駅 京阪バス時刻表 (土曜日)

① 摂南大学→<京阪>寝屋川市駅 (乗り場：正門出て道路を渡る)

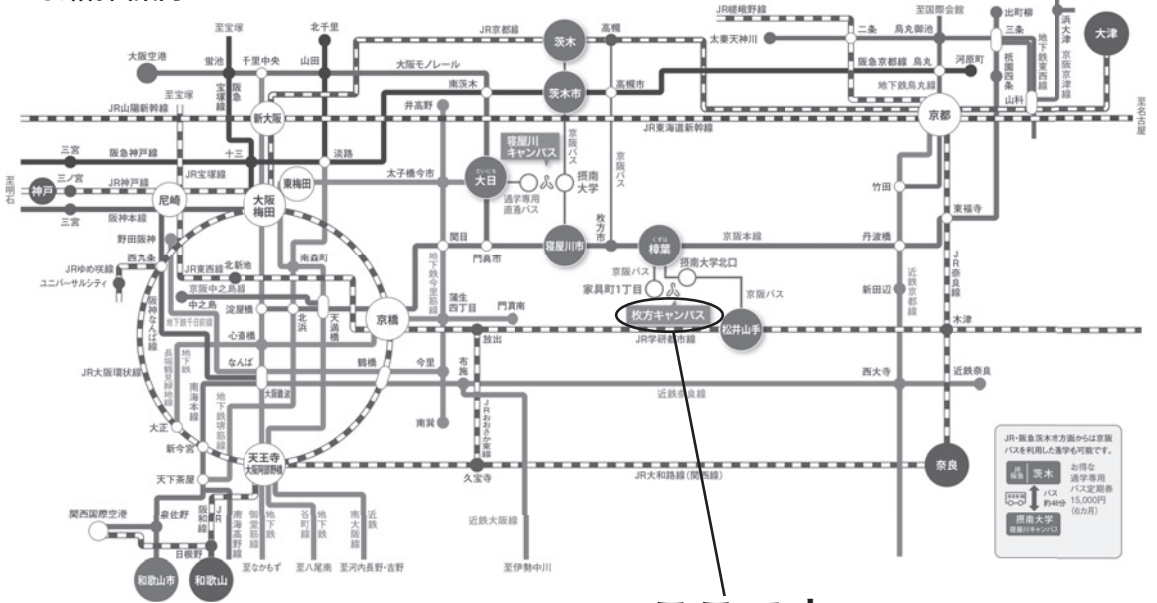
行き先		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
[3]	寝屋川市駅			11		00	00	00	00	00	00	00	00	07						
[5]			17	27	15	15	15	15	15	15	15	15	16	16	07					
[10]		23	31	42	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	37	37	30	21		
[11]		49	46	50	45	45	45	45	45	45	45	45	45	46	46	54				
[12]			56	50	55	45	45	45	45	45	45	45	45	46	46	54				
[直通]				58	55	55	55	55	55	55	55	55	56	57	55					

② 摂南大学→<阪急>茨木市駅・<JR>茨木駅 (乗り場：正門出て道路を渡らず右手)

行き先		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
[12]	J R茨木東口	20	18 33	鳥03 18 43	13 43	13 43	13 43	13 43	13 43	13 43	13 43	13 43	14 44	14	19				

■ お車でも来場可能ですが、駐車場に限りがございますので、10月20日(月)までに [sumiyosi@ilc.setsunan.ac.jp](mailto:sumiyosi@ilc.setsunan.ac.jp) (住吉) にお尋ねください。

●路線図案内



5号館 ワークショップ・  
研究発表・総会・  
シンポジウム会場

11号館 懇親会会場

